

# 猿新聞

## 獣害の歴史



### 先人の知恵

古代からイノシシと農民との攻防は続いています。

近代に至っても防御の過酷さから「嫁に行くならイノシシのいなところ」といわれたくらい、女性にはシシ追いは過酷な労働でした。歴史をさかのぼると、獣害に悩まされていた先人たちの涙ぐましい努力が見えてきます。例えば、万葉集には次のような歌が詠まれています。

「魂合はば相寝むもの」を、小山田の鹿猪田守ること、母守らすも」

（想いが同じならば二人で一夜を過ごしたいが鹿や猪が出没する田を見張るように母が見ているので逢うことができない）

また、「秋山紀行」《江戸時代の秋山郷（新潟県）の生活を綴った書物》鈴木牧之著にも、こん件りが「…其前後左右畝無き畑にて、遠く村屋を離たる山畑には必小屋懸ありて、

編集責任者 山村 準

tel:0595-63-1725

Email

kyun.y@asint.jp

名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】

錦生地区：100部

赤目地区：150部

箕曲地区：70部

ひなち地区：200部

つつじが丘：440部

【全戸配布】

国津地区：380部

市民センター：90部

(9地区)

名張市議会：20部

名張市役所：20部

裾より茅を以草上げ屋は女、夜は男、替るがわる猪・猿の畑を荒すを追はんが為に、小屋の外には狗を放し置に、獣出れば必此犬吠追ふと云ふ。故に秋山にては、家一軒に一つ宛は飼置となん…」

昭和45（1970）年、犬の放し飼が禁止されるまで、犬が獣害防除の重要な一端を担っていたのです。鹿や猪から田畑を守るために番をする「ししおい」は、近世まで行われていました。収穫期になると農地のそばに小屋を建て、大

江戸時代、人口の増加に伴い農村は急速に耕地を拡大し、農業生産の拡大に伴って野生鳥獣との軋轢は高まりました。寛延3（1750）年、八戸藩ではイノシシによる被害で3000人の餓死者が出る甚大な被害が発生しています。寛政年代

声を出しり鳴子などで追い払い、夜通しで田畑の見張りをする方法が講じられていました。今思うと滑稽にも思えますが、当時はこれが最善の方法だったのかもしれない。夜通し見張らなければならぬので、農民の肉体的負担は大きく翌日の農作業にも影響を及ぼしていたそうです。人間の汗の匂いのついた案山子を立てたり、髪の毛を燃やしたり、匂いの忌避効果も利用していました。（案山子はそもそも人間の臭いを「嗅がす」ことからこの名前があるらしい）。



写真Ⅰ「シシ垣」尾鷲市三木里

このことですが、イノシシ被害に困り果てた農民が最後の手段として神頼みをしています。オオカミを祀る三峰神社の守り札を田圃の周りに張ったとか、笑うに笑えない話があります。先人達と獣との攻防を生々しく残しているものにシシ垣があり、恒久的なシシ垣は、今もその遺構を見ることが出来ます。シシ垣には、木や竹・石・土を

の地形を利用してしたものなどがあります。江戸時代には長さが10kmを超える大規模なものが構築されています。小豆島では、寛政2（1790）年全島を一周するシシ垣が完成したといわれています。これほど大規模なシシ垣を造り上げた先人の力に、今を生きる私達はもっと注目すべきだと思います。シシ垣造りは金・労

なものでした。江戸時代初期では藩からの助成金がありました。江戸時代も後半になると、藩からの助成金も打ち切られ、農民たちは自主的に対策資金をプールして、その資金でシシ垣の修繕を行っていたといえます。江戸時代中期、鳥獣による農作物の被害が増加し農民は鳥獣対策として、領主に鉄砲所持を願い出ています。幕府は年貢を確保するためにこれを認め無償で貸与したといえます。所謂「威筒」です。徳川綱吉の「生類憐みの令」が下されていたときでさえ「威筒」や獣害駆除に使用するための大量の火縄銃が村々に貸し出されていたといえます。これを機に農村での鉄砲普及が進み狩猟も盛んに行われるようになりました。当時の狩猟本来の目的は、獣肉や毛皮などを得ることで、保護・管理の意識は低かったようです。だが、その狩猟活動によって生態系が適正に保全されていたことは事実です。天武4（675）年



写真Ⅱ伊賀・名張の里より

日本では始めて鳥獣保護が法律によって定められ、勅命による肉食禁止令。江戸時代では、徳川綱吉が生類憐れみの令を出すなど、狩猟の衰退した時代が長く続きました。明治時代

あたりまで日本での動物の絶滅が見られなかったのも、この法令のおかげかもしれません。明治に入り、幕府による銃禁制が解かれ、高性能の銃が導入されて防除から保護・管理が優先され、狩猟が獣害対策の手段に変化して現在に至っています。現代社会に生きる私たちは技術の進歩によって、寝ずの番で猪追いやなどをする必要はなくなりませんが、獣害は今に始まったことではなく、江戸時代から日本の農山村では、獣害に悩まされ続けてきた経緯があります。歴史を振り返り、先人の知恵と努力を再度見直すことも大切なことだと思えます。

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

## 農山村社会と都市のつながり

域で獣害対策が継続できない

域で獣害対策が継続できない

日本は8年連続で人口減少が続いています。少子高齢化が叫ばれて久しいが、ここに来て、人口減少が明らかに目に見える形で表れてきています。

農業地域はその土地の特性によって次の様に分割されていて、「都市的領域」「平地」

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

「都市的領域」「平地」に分割されていて、

# 名張A群と青山A群の合流？

名張市周辺には名張A群と名張B群というサル群が存在し、青蓮寺湖付近を境界に東側をA群、西側にB群とそれぞれエリアを広げています。

群れと群れの遊動域は少しづつ重なりあっていることが多く、それぞれの群れは、群れのメンバーが変わっていても、遊動域を大きく変えることなく受け継がれ生活を続けていきます。

群れのサイズを決めているのは、行動範囲内の食物の多・小にあるといわれています。つまり行動範囲の中に、群れのサルたち全頭が余裕を持って食べるこ

とができて、この先何頭まで増えることができる食物の量があるかどうかということ。また、分裂の前に行動範囲が拡大して、こ



今は亡き 白ザル

れまでに一度も行ったことのない地域に行ったりすることがよくあるらしいです。

サルが群れる主な理由に敵から身を守ることであるといわれています。ある一匹が敵を見つけて声を上げることで、群れ全体が敵に気づき被害を最小限に出来るということ。群れの誘導域内での広がりや季節によって変わってきます。例えば、秋は実りの季節で、最も食べ物が豊富で群れの固体は大きく広がることなく一本の木に集まって採食することができます。しかし冬になると、これらの実は地面に落ちて散らばってしまおうので、固体の菜食間隔は大きく広がります。夏は食物が多いと思われませんが、実際は冬に次いで食物の乏しい季節。春に多くあつた新葉や花は少なく、果実や種子は熟していなく秋のようにまとまった食物はないので、多くの個体が集まって菜食することはなく、群れは広がっていきま

す。だが、遊動域を大きく

はみだすことはいよいよです。前置きが長くなりましたが、先月号でお知らせしました名張A群の行動域は依然として不明です。

約15年位前から伊賀市種生区周辺では白猿を含む群れが生息していましたが、名張A群が種生区周辺に移動していたということも考えられます。それは、その後まもなく名張A群エリアで白猿を見かけるようになったから

です。

青山A群と名張A群の関係は親密で、毎年7月～9月にはその遊動域は大きく重なることがわかっています。ところが、ここ6年位前から名張A群の青山方面への移動はなくなっています。

付近で13頭目視。  
★11月5日、弁天橋付近で10頭目視。  
★11月6日、つつじが丘で目視。  
★11月8日、香落橋付近で8頭ほど目視。  
★11月9日、中知山で10頭目視。  
★11月11日、上比奈知トンネル付近で強受信。  
★11月12日、上比奈知国津神社近辺にて中程度の電波受信。  
★11月13日、青蓮寺湖周辺で5頭目視。  
★11月14日、弁天橋付近で15頭ほど目視。  
★11月15日、中知山集落で中程度の電波受信。  
★11月16日、中知山集落で3頭目視。  
★11月17日、奈垣で群れ点在。  
★11月18日、奈垣山中で食痕多数あり。  
★11月19日、つつじが丘南8番町10頭目視。  
★11月19日、弁天橋付近で6頭目視。  
★11月20日、つつじが丘南7番町公園にハナレ。比奈地湖展望台付近で3頭目視。これが最近の出没情報です。

名張B群の「サル」の情報は皆無ですが、最近、元錦生小学校付近の太陽光発電所敷地内に柿の食痕や大量の糞があるとの情報があります。

伊賀市青山町霧生では、最近サルによる柿や柑橘類の被害が近年に無いほど増えたという情報もあります。

枯れが蔓延している。更にはマツ枯れの終焉も遠い先の話です。ナラ枯れやマツ枯れも昆虫、線虫、菌類が原因で発生する樹木の病気で、森林資源の損失だけでなく、森林が持つ公益的機能の低下を招くもので、獣害以上の損失があるものと考えられます。

今回は、農作物の病虫害について考えて見ましよう。

農作物には何種類の

必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。化成肥料の多用は病虫害が繁殖しやすい環境をつくるのです。必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。酸化チソンになると吸汁性の害虫のエサになり大量発生を促します。

農家は、高いお金をかけて土壌を壊しているようなものです。

病虫害繁殖条件のうち一つは、ホームセンターなどで市販されている嫌気醗酵の有機物です。袋に嫌気醗酵有機肥料と書いてありますが、鶏糞にはできません。

有機肥料は有機物を醗酵させるのが一般的な方法ですが市販のものには製造過程が不明

な物が多いです。未熟醗酵のものを畑に入れると、アンモニアが酸化してガスが湧き、土の中で悪玉菌が大繁殖し病虫害発生につながります。

家庭菜園では皆さんが有機栽培をめざして化成肥料を使わず、市販の有機肥料を求めていますが、肥沃な病虫害に強い土をつくるためには自家製の完熟堆肥（くまし）が一番です。だが、良質な有機肥料でも100%完熟というものはなく施用量が多いと肥料の未熟さから来る弊害でやはり病虫害に弱くなるリスクはあります。

最後は農薬散布です。今、農家はこのような悪循環を毎年繰り返しているのです。

※嫌気醗酵II有機物を無酸素状態で活発に活動する微生物に分解させる方法です。

※「病虫害」「病虫害」と使い分けても間違いではないと個人的には思っています。

※国語辞典を見てみると「病虫害」はほとんど「病虫害」であるが、「病虫害」を載せているものは少ないです。

編集局より  
今月はサル移動状況は休載します。  
一年間のご愛読を感謝しあげると共に、来る年も本年に倍したご協力ご支援を、お願い申し上げます。

3年ほど前の固体調査で名張A群は約10頭増えました。それに引き換え青山の群れが10頭ほど減ったことがわかり、このことから両群の合流が現実味を帯びてきます。

名張A群は曾爾村にも行っていたことから曾爾村方面も搜索しましたが手がかりはないということ。また、B群地区も考えられますが、青蓮寺湖から西方面には移動していないようです。

青山A群は約20頭、名張A群は約30頭で両群が合流したとなれば約50頭という大きな群れが、何処かで行動しているものと考えられます。

10月7日青蓮寺湖冒険広場付近で20頭程が目視されて以来、行方は不明のA群が遂に戻ってきました!

★10月29日、青蓮寺橋で15頭目視。  
★10月30日、赤岩大橋付近で20頭ほど目視。  
★10月31日、比奈知湖下山橋付近で10頭ほど目視。電波も受信。  
★11月2日、青蓮寺橋付近で電波受信。  
★11月3日、青蓮寺湖

病虫害と肥料の関係

近年、鳥獣による農林業被害が深刻化し、鳥獣害に農目が集中し、昔からあつた病虫害への関心度は低下しているように思われます。日本の森林ではナラ枯れが蔓延している。更にはマツ枯れの終焉も遠い先の話です。ナラ枯れやマツ枯れも昆虫、線虫、菌類が原因で発生する樹木の病気で、森林資源の損失だけでなく、森林が持つ公益的機能の低下を招くもので、獣害以上の損失があるものと考えられます。

今回は、農作物の病虫害について考えて見ましよう。

農作物には何種類の

必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。化成肥料の多用は病虫害が繁殖しやすい環境をつくるのです。必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。酸化チソンになると吸汁性の害虫のエサになり大量発生を促します。

農家は、高いお金をかけて土壌を壊しているようなものです。

病虫害繁殖条件のうち一つは、ホームセンターなどで市販されている嫌気醗酵の有機物です。袋に嫌気醗酵有機肥料と書いてありますが、鶏糞にはできません。

有機肥料は有機物を醗酵させるのが一般的な方法ですが市販のものには製造過程が不明

な物が多いです。未熟醗酵のものを畑に入れると、アンモニアが酸化してガスが湧き、土の中で悪玉菌が大繁殖し病虫害発生につながります。

家庭菜園では皆さんが有機栽培をめざして化成肥料を使わず、市販の有機肥料を求めていますが、肥沃な病虫害に強い土をつくるためには自家製の完熟堆肥（くまし）が一番です。だが、良質な有機肥料でも100%完熟というものはなく施用量が多いと肥料の未熟さから来る弊害でやはり病虫害に弱くなるリスクはあります。

最後は農薬散布です。今、農家はこのような悪循環を毎年繰り返しているのです。

※嫌気醗酵II有機物を無酸素状態で活発に活動する微生物に分解させる方法です。

※「病虫害」「病虫害」と使い分けても間違いではないと個人的には思っています。

※国語辞典を見てみると「病虫害」はほとんど「病虫害」であるが、「病虫害」を載せているものは少ないです。

編集局より  
今月はサル移動状況は休載します。  
一年間のご愛読を感謝しあげると共に、来る年も本年に倍したご協力ご支援を、お願い申し上げます。

病虫害と肥料の関係

近年、鳥獣による農林業被害が深刻化し、鳥獣害に農目が集中し、昔からあつた病虫害への関心度は低下しているように思われます。日本の森林ではナラ枯れが蔓延している。更にはマツ枯れの終焉も遠い先の話です。ナラ枯れやマツ枯れも昆虫、線虫、菌類が原因で発生する樹木の病気で、森林資源の損失だけでなく、森林が持つ公益的機能の低下を招くもので、獣害以上の損失があるものと考えられます。

今回は、農作物の病虫害について考えて見ましよう。

農作物には何種類の

必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。化成肥料の多用は病虫害が繁殖しやすい環境をつくるのです。必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。酸化チソンになると吸汁性の害虫のエサになり大量発生を促します。

農家は、高いお金をかけて土壌を壊しているようなものです。

病虫害繁殖条件のうち一つは、ホームセンターなどで市販されている嫌気醗酵の有機物です。袋に嫌気醗酵有機肥料と書いてありますが、鶏糞にはできません。

有機肥料は有機物を醗酵させるのが一般的な方法ですが市販のものには製造過程が不明



写真＝鎌江集落で

付近で13頭目視。  
★11月5日、弁天橋付近で10頭目視。  
★11月6日、つつじが丘で目視。  
★11月8日、香落橋付近で8頭ほど目視。  
★11月9日、中知山で10頭目視。  
★11月11日、上比奈知トンネル付近で強受信。  
★11月12日、上比奈知国津神社近辺にて中程度の電波受信。  
★11月13日、青蓮寺湖周辺で5頭目視。  
★11月14日、弁天橋付近で15頭ほど目視。  
★11月15日、中知山集落で中程度の電波受信。  
★11月16日、中知山集落で3頭目視。  
★11月17日、奈垣で群れ点在。  
★11月18日、奈垣山中で食痕多数あり。  
★11月19日、つつじが丘南8番町10頭目視。  
★11月19日、弁天橋付近で6頭目視。  
★11月20日、つつじが丘南7番町公園にハナレ。比奈地湖展望台付近で3頭目視。これが最近の出没情報です。

病虫害と肥料の関係

近年、鳥獣による農林業被害が深刻化し、鳥獣害に農目が集中し、昔からあつた病虫害への関心度は低下しているように思われます。日本の森林ではナラ枯れが蔓延している。更にはマツ枯れの終焉も遠い先の話です。ナラ枯れやマツ枯れも昆虫、線虫、菌類が原因で発生する樹木の病気で、森林資源の損失だけでなく、森林が持つ公益的機能の低下を招くもので、獣害以上の損失があるものと考えられます。

今回は、農作物の病虫害について考えて見ましよう。

農作物には何種類の

必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。化成肥料の多用は病虫害が繁殖しやすい環境をつくるのです。必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。酸化チソンになると吸汁性の害虫のエサになり大量発生を促します。

農家は、高いお金をかけて土壌を壊しているようなものです。

病虫害繁殖条件のうち一つは、ホームセンターなどで市販されている嫌気醗酵の有機物です。袋に嫌気醗酵有機肥料と書いてありますが、鶏糞にはできません。

有機肥料は有機物を醗酵させるのが一般的な方法ですが市販のものには製造過程が不明

な物が多いです。未熟醗酵のものを畑に入れると、アンモニアが酸化してガスが湧き、土の中で悪玉菌が大繁殖し病虫害発生につながります。

家庭菜園では皆さんが有機栽培をめざして化成肥料を使わず、市販の有機肥料を求めていますが、肥沃な病虫害に強い土をつくるためには自家製の完熟堆肥（くまし）が一番です。だが、良質な有機肥料でも100%完熟というものはなく施用量が多いと肥料の未熟さから来る弊害でやはり病虫害に弱くなるリスクはあります。

最後は農薬散布です。今、農家はこのような悪循環を毎年繰り返しているのです。

※嫌気醗酵II有機物を無酸素状態で活発に活動する微生物に分解させる方法です。

※「病虫害」「病虫害」と使い分けても間違いではないと個人的には思っています。

※国語辞典を見てみると「病虫害」はほとんど「病虫害」であるが、「病虫害」を載せているものは少ないです。

編集局より  
今月はサル移動状況は休載します。  
一年間のご愛読を感謝しあげると共に、来る年も本年に倍したご協力ご支援を、お願い申し上げます。

必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。化成肥料の多用は病虫害が繁殖しやすい環境をつくるのです。必要以上の化成肥料の使用は土壌の酸化の原因に繋がります。酸化チソンになると吸汁性の害虫のエサになり大量発生を促します。

農家は、高いお金をかけて土壌を壊しているようなものです。

病虫害繁殖条件のうち一つは、ホームセンターなどで市販されている嫌気醗酵の有機物です。袋に嫌気醗酵有機肥料と書いてありますが、鶏糞にはできません。

有機肥料は有機物を醗酵させるのが一般的な方法ですが市販のものには製造過程が不明

な物が多いです。未熟醗酵のものを畑に入れると、アンモニアが酸化してガスが湧き、土の中で悪玉菌が大繁殖し病虫害発生につながります。

家庭菜園では皆さんが有機栽培をめざして化成肥料を使わず、市販の有機肥料を求めていますが、肥沃な病虫害に強い土をつくるためには自家製の完熟堆肥（くまし）が一番です。だが、良質な有機肥料でも100%完熟というものはなく施用量が多いと肥料の未熟さから来る弊害でやはり病虫害に弱くなるリスクはあります。

最後は農薬散布です。今、農家はこのような悪循環を毎年繰り返しているのです。

※嫌気醗酵II有機物を無酸素状態で活発に活動する微生物に分解させる方法です。

※「病虫害」「病虫害」と使い分けても間違いではないと個人的には思っています。

※国語辞典を見てみると「病虫害」はほとんど「病虫害」であるが、「病虫害」を載せているものは少ないです。

編集局より  
今月はサル移動状況は休載します。  
一年間のご愛読を感謝しあげると共に、来る年も本年に倍したご協力ご支援を、お願い申し上げます。